

ライフキャリアの視点からみた
高校生の「情報社会を生きる」ことに関するイメー
ジの調査・分析：
「進学校」と「進路多様校」の比較を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同 教科開発学専攻 公開日: 2024-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 可知, 穂高, 塩田, 真吾 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000540

【論文】

ライフキャリアの視点からみた 高校生の「情報社会を生きる」ことに関するイメージの調査・分析 — 「進学校」と「進路多様校」の比較を通して —

可知 穂高, 塩田 真吾

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科後期3年博士課程, 静岡大学教育学部

要約

近年のキャリア教育においては、仕事だけに偏重しない多様な人生上の役割に着目したライフキャリア教育が注目されている。しかし、従来のライフキャリア教育には、これからの情報社会の視点が欠けていることや、進路多様校を対象とした実践が少ないことが課題として指摘されている。そこで本研究では、進路多様校の生徒を対象とした情報社会におけるライフキャリア教育の内容構築に向け、進学校と進路多様校の高校生を対象に「生きる上で重視する人生上の役割」と「情報社会のイメージ」に関する調査を行った。その結果、高校生は人生の「仕事」「家庭生活」「余暇」を特に重視することがわかった。また、進路多様校の生徒は、情報社会におけるこれらの負担は減少すると捉えており、時間は「仕事」「家庭生活」が短くなる一方で、「余暇」は増加すると捉えていた。そして、進路多様校の生徒は情報社会を生きることに関心する一方、リスクなど負の側面をイメージする生徒は少ないことがわかった。

キーワード

ライフキャリア教育, キャリア教育, 余暇, 生涯学習, 人生上の諸リスク

1 はじめに

「キャリア教育」という言葉が1999年の中央教育審議会答申¹に登場して以来、様々なキャリア教育の実践や研究が行われ、子どもたちの幸せな人生の構築が目指されてきた。しかし、キャリア教育の実践の多くは勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られてきたとの指摘がある²。また、高等学校や大学での実践は就職支援等の出口支援が中心になっていることが課題としてあげられている³。どのような職業に就くか、就職が成功するか、就職先で役に立つスキルかといった目先の職場で働くための「職業準備教育」だけに偏重したキャリア教育の在り方に疑問が呈されている⁴。

そもそも「キャリア」とは「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していき連なりや積み重ね²と定義されている。キャリア教育は、こうした定義をふまえて「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育⁵と定義されている。これは「子ども・若者が、社会の一員としての役割を果たすとともに、それぞれの個性、持ち味を最大限発揮しながら、自立して生きていくために必要な能力や態度を育てる⁵教育である。ここでは、「入学試験・就職試験に合格させるための支援や指導に終始する実践(いわゆる出口指導)²との混同に注意を払う必要がある。しかし、実際はキャリア教育本来の理念と現場の実践との間に、差が生じていると言える。

この問題に対し、近年ではキャリアを「ライフキャリア」として捉えるライフキャリア教育の実践が注目されている。ライフキャリア理論の起源と言える Supper (1953)⁶では、キャリアを人生における多様な役割が組み合わさって構築されるものと捉え、人生は、労働者、家庭人、市民、学習者、余暇人等の多様な役割を並行して担うものと示されている。また Hansen (1996)⁷は、人生における「仕事」「学習」「余暇」「愛」の4つの役割を統合的に捉えた。こうした理論をもとに、河崎 (2010)⁸は、キャリアを広義で「生涯にわたる役割に関連した実践の道筋・進路」とし「ライフキャリア」として定義した。また狭義ではキャリアを「職業および職務に関連した一連の道筋・進路」の職業キャリアと「生涯にわたる家庭生活や地域生活における役割や実践の道筋・進路」の生活キャリアの両側面から捉えた。そして、これらの定義を踏まえて、職業に偏重しないライフキャリア教育の必要性を指摘した。こうしたライフキャリア教育は、近年のキャリア教育の課題を解決する上で効果的な教育的アプローチの1つであると言える。

さらに、ライフキャリア教育は子ども達が「よりよく生きる」上でも効果的な教育であると考えられる。「身体的・精神的・社会的に良い状態」としての Well-being⁹の向上が注目される昨今では、短期的で主観的な幸福だけではなく、「生活の質」として「健康状態」や「仕事と生活のバランス」、「社会とのつながり¹⁰など、より包括的かつ持続的な幸福の実現が求められている。この Well-being が保たれた状態が、「よりよく生きている」状態だと言える。日本

では、日本社会に根ざした Well-being として、自己肯定感等の獲得的要素と社会貢献性などの協調的要素の調和を重視することが求められている⁹。

キャリア教育で育成すべき力は、「基礎的・汎用的能力」「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」²が有名である。これは、類似性の高い内閣府の「人間力」¹¹や経済産業省の「社会人基礎力」¹²、厚生労働省の「就職基礎能力」¹³と共に分析され構成された経緯がある。従って、『分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力』²として主に「仕事に就くこと」に焦点が当てられた能力であると考えられる。

これに対して、ライフキャリア教育では、河崎 (2011)¹⁴によって育成すべき6つの能力領域(「自己理解」「人間関係」「意思決定」「就業開発」「生活実践」「キャリア統合」)が明らかにされている。この能力領域には、仕事に直接関わる「就業開発」に加え「生活実践」が1つの能力領域として確立している。「生活実践」とは、「生活キャリアに関する知識やスキルを実践的に獲得する」¹¹領域である。つまり家庭生活や地域生活という「働くこと」だけでない人生上の多様な役割に着目した能力領域になっている。河崎 (2011)の能力領域にこうした特徴が現れているのは、この能力領域が家庭科におけるキャリア教育の在り方(河崎, 2000¹⁵, 2003¹⁶)を基に構成されているからだと考えられる。そして、就労や家庭生活・地域生活の役割を包括的に捉え設計していく力として「キャリア統合」が位置づけられている。この能力領域は、自己開発としての「個の発達」と、他者支援や社会貢献などの「関係性の発達」、双方の側面から相互補完的に育成するべきとされている。ライフキャリア教育で育成するこうした能力は、生徒がこれからの社会を「よりよく生きる」ことに繋がると考えられる。

ライフキャリア教育の実践については、丸山ら (2016)¹⁷が授業プログラムの枠組みを構築し、丸山 (2016)¹⁸が高等学校・大学におけるライフキャリア教育プログラムの開発と実践を行っている。しかし、ライフキャリア教育研究や実践は十分であるとは言い難い。国内のライフキャリア教育に関する研究動向を調査した可知ら (2023)¹⁹によると、従来の研究では「大学生・大学」を対象とした研究が最も多く、就学前段階から初等中等教育における実践は少なかった。また「高校生・高等学校」を対象とした実践研究は、対象が進学校と限定的であった。この状況を鑑みると、ライフキャリアに関する研究は特定の対象に偏重しており、十分であるとは言い難い。特に、進学校ではない高等学校を対象とした実践は喫緊の課題であることがわかる。

この「進学校ではない高等学校」は、「進路多様校」と呼ばれている¹。進路多様校には「自分に対する向き合い方に自信を持つことができず、自らの将来に向けて展望を描

くことに対して積極的に取り組むことを苦手とする生徒が多い」(小川, 2021)²⁰との指摘がある。また、進路多様校の生徒は「多くの選択肢の中から、自分の能力や環境を踏まえた進路選択を行わなければならない」(水野, 2013)²¹とされており、進路多様校の生徒の実態に即したキャリア教育の充実は従来からの課題である。

さらに可知ら (2023) は、これまでのライフキャリア教育には、情報社会が社会や生活にもたらす変化の視点が欠けていることを課題として指摘している。既に近年の情報技術の革新的な進歩は、子ども達の社会環境・就労環境に大きな影響を及ぼし、日常生活の幅広い領域に変化をもたらしている。例えば、AI やロボティクスの発展は、従来の人間の仕事を代替・自動化し、人間のタスク内容を変化させている。そして、不要な職業と新たに必要な職業が生まれ出されることで、これまでにない新たなスキルの習得を人間に要求するようになってきている²²。また、テレワークの普及は、場所と時間にとらわれない新たな働き方を実現させた。これには「家事を両立しやすい」「家族といられる時間が増える」等のメリットを生み出した一方で、「仕事とプライベートの区別がつかない」等のデメリットも指摘されている²³。Society5.0 時代の働き方としては、従来の「終身雇用」が「多様な雇用形態・働き方」へ、そして「年功序列」が「多様な処遇制度」への変更が指摘されている(一般社団法人日本経済団体連合会, 2018)²⁴。情報社会は、従来の働き方を大きく変化させ、その影響は仕事を超えた多様な生活領域にまで及んでいるといえる。

以上の議論から、情報技術が発展した社会でよりよく生きるための力を育成するライフキャリア教育の開発が必要だと考えられる。ライフキャリア教育の内容を構築するにあたっては、まず教育対象者である進路多様校の高校生が「これからの情報社会を生きること」に対して持っているイメージの実態を把握し課題を明らかにする必要がある。従来の研究では、田澤 (2005)²⁵が未婚の女子大学生を対象に、5年後の各生活領域(仕事、家庭、余暇、地域社会、その他)の中で相対的に「仕事」をどれほど重視するか調査しているが、この研究の対象は高校生ではなく、また情報社会の将来を考える視点も含まれていない。そこで本研究では、進路多様校の生徒が有する「情報社会を生きること」のイメージの実態を明らかにすることを目的に、まず「人生で重視したい人生上の役割(以下: 人生役割)」を調査する(調査1)。次に、情報社会の視点から「情報社会における人生上の役割の変化」に対する考え(調査2-1)と「情報社会そのもの」に対するイメージを調査(調査2-2)する。「社会を生きること」と「情報社会」に対するイメージの調査を掛け合わせて分析することで、「情報社会を生きること」に関する実態を明らかにできると考えられる。そして、進路多様校の実態をより具体的に捉えるために、調査対象に進学校を加え両者の比較を通して分析をす

る。情報社会のイメージに関しては、直井ら (2003) ²⁶が 2001 年に 20 歳以上 89 歳以下の男女を対象とした情報社会に抱くイメージ調査を行っている。この調査では、情報技術の影響が今後社会にどのような変化を生じさせると思われるかを調査しており、本研究の参考にできると考えられる。

本研究を通して、進路多様校を対象とした情報社会におけるライフキャリア教育の内容構築に向けた実践的示唆が得られると考えられる。

2 方法

調査時期

2023 年 4 月に行った。

対象と測定方法

対象は、高等学校 A の高校 3 年生 104 名 (男性 : 40 人, 女性 : 64 名) と高等学校 B の高校 2 年生 163 名 (男性 : 85 名, 女性 : 78 名) である。調査時の高等学校 A の回答者の進路希望は、4 年制大学 76.0%, 短期大学 6.7%, 専門学校 10.6%, 未決定 6.7% であり、高等学校 B の回答者の進路希望は、4 年制大学 19.6%, 短期大学 3.1%, 専門学校 32.5%, 就職 27.6%, 未決定 16.6% である。高等学校 A は回答者の 8 割以上が大学進学を希望する進学校であり、高等学校 B は回答者の希望進路が大学進学や専門学校、就職と多様である進路多様校である。調査時、高等学校 A の生徒は平成 22 年告示の学習指導要領解説情報編における「社会と情報」を 1 年生の時に受講済みであった。また、高等学校 B の生徒は平成 30 年告示の学習指導要領解説情報編における「情報 I」を受講途中であり、「情報社会と問題解決」²⁷の項目の学習途中であった。調査 1・2 ともに、Google Forms を活用して調査を実施した。得られた回答のうち、回答方法や項目に不備がなかった者の回答を分析対象とした。

尺度

調査 1 について、高校生が人生を生きる上で重視する人生上の役割とその調査方法については、前述した田澤 (2005) の研究を参考にした。田澤 (2005) の研究では、各人生役割をどれほど重視しているかについて、全体を 100 とした得点配分を求める方法で調査を行っている。本調査もこの調査方法を採用するとともに、調査対象が高校生であることに留意して、調査内容や方法を次のように設定した。調査内容は、「①高校生の今の人生」と「②就職して 3 年後の人生」の 2 つの場面を設定し、「それぞれの人生をよりよく生きるためには、各人生役割がどれほど重要だと思うか」について重要度の得点配分を求めた。高校生にとって将来の想定は遠ければ遠いほど難しいと考えられることから、本研究では「就職して 3 年後の人生」を想定するよう設定した。人生役割について、①の場合は「学校の勉強、部活動、家庭生活、地域・社会、自主的学習、

余暇」の 6 つを、②の場合は「仕事、家庭生活、地域・社会、自主的学習、余暇」の 5 つをそれぞれ設定した。高校生が回答時に各人生役割の内容をイメージしやすいよう、各人生役割を表 1 のように示した。また、得点配分は回答時の計算の負担を減らすため 10 点ごとで配分を求めた。

表 1 調査 1 の人生役割

高校生の今の人生	
学校の勉強	学校の勉強が充実している。
部活動	学校の部活動が充実している。
家庭生活	家族や家庭での生活が充実している。
地域・社会	地域の行事やボランティアなど、地域・社会との繋がりが充実している。
自主的学習	学校以外の自主的な学習が充実している。
余暇	趣味や友人との付き合いの時間など、余暇の使い方が充実している。
就職して 3 年後の人生	
仕事	仕事が充実している。
家庭生活	子育てや介護、結婚生活等の家庭生活が充実している。
地域・社会	地域の行事やボランティアなど、地域・社会との繋がりが充実している。
自主的学習	自主的な学習活動が充実している。
余暇	趣味や友人との付き合いの時間など、余暇の過ごし方が充実している。

調査 2-1 の「情報社会における人生上の役割の変化」に対するイメージの調査については、情報化が進んだ今後の社会における「仕事、家庭生活、地域参加、自主的学習、余暇」の「負担」や「仕事、家庭生活、余暇」の「時間」、そして「地域参加の機会」と「自主的学習の必要性」がどのように変化すると思うかのイメージを調査した。回答方法について、「負担」は「1 : 楽になる : 2 : 変わらない, 3 : 大変になる」の 3 段階を設定した。また、「時間」、「地域参加の機会」、「自主的学習の必要性」は「1 : 増える, 2 : 変わらない, 3 : 減る」の 3 段階で評定した。

調査 2-2 の「情報社会そのもの」に対するイメージ調査については、「情報社会そのもの」だけでなく「AI (人工知能)」に対するイメージも調査した。AI は、社会の生活を大きく変化させる情報技術の代表である。AI に関する調査を追加することで、情報社会に対する高校生のイメージを多面的に捉えることができると考えられる。「情報社会そのもの」については、前述した直井ら (2003) の情報社会のイメージを問う「情報化社会イメージ」の質問項目を参考にした。質問項目の語尾を「～社会」とし、「あなたは、これからの『情報社会』をどのような社会だと考えていますか?」と問うた。調査 2 の具体的な調査内容、調査項目を表 2 に示す。抽象的な表現は具体性を高めるなどの修正を加え、16 項目を設定した。本研究で設定した 16 項目は、直井ら (2003) の質問項目の分類に従い、「期待 (項目 1～項目 6)」、「不安と懸念 (項目 7～項目 10)」、「個人情報 (項目 11)」、「人間関係への影響 (項目 12～14)」、「社会の変化 (項目 15・項目 16)」の 5 つに分類した。「AI (人工知能)」については、消費者庁が 2020 年に行った第 1 回消費者意識調査

27における、「AIに対するイメージについて」と「AI（人工知能）について不安に感じる事」の質問項目を参考に10項目を設定した。そして「あなたは、『AI』に対して、どのようなイメージを持っていますか?」と問うた。質問項目1~5は「期待」、質問項目6~10は「不安」に関する項目として分類した。高校生でも回答しやすいよう内容が大幅に変わらない範囲で質問の表現を適宜修正した。例えば、「AIによる自身の意思決定・感情が操作されてしまう」の質問項目は、「人間の意志や感情がコントロールされる（項目10）」のように修正した。また、AIについては、「AI（人工知能）とは、通常人間の知能が行う活動（声や音を聞いて理解する、判断を行うなど）を、コンピュータが学習して実行するものの総称のことです」と補足説明を加えた。回答方法は、リッカート尺度により5段階（1：全くそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらともいえない、4：ややそう思う、5：とてもそう思う）で評定した。全ての調査の実施は、回答者の個人が特定されないよう配慮するとともに、本人の同意を得て実施した。

分析方法

調査1と調査2-2は、進学校・進路多様校ごとに各人生役割における配点の平均値と標準偏差を算出した。また、学校別の相違を検討するために母平均の差の検定（Welchのt検定）を各人生役割に対して行った。調査2-1は、クロス集計によって学校別の結果の分布を分析した。また、学校別の結果の相違を検討するために χ^2 独立性の検定を行った。有意水準は、 $P < .05$ 及び $P < .01$ とした。分析には統計ソフトであるエクセル統計（Bellcurve for Excel）4.05を用いた。

3 結果

まず、調査1の結果を表3に示す。「①高校生の今の人生」の平均値を参照すると、進学校で最も重要度が高い人生役割は「学校の勉強」であり、次いで「家庭生活」であった。進路多様校では「余暇」であり、次いで「家庭生活」であった。一方で、最も重要度が低い人生役割は、進学校、進路多様校共に「地域・社会」であった。人生役割毎に、学校別の回答結果をWelchのt検定で比較した結果、「①高校生の今の人生」では「学校の勉強」[t(196.29) = 2.006, $p = .036$, $d = 0.284$], 「自主的学習」[t(165.08) = 4.197, $p < .001$, $d = 0.599$], 「余暇」[t(208.01) = 4.497, $p < .001$, $d = 0.585$]において、有意な差がみられた。

「②就職してから3年後」の平均値を参照すると、進学校・進路多様校共に重要度が最も高い人生役割は「仕事」であり、次いで「余暇」「家庭生活」であった。一方で、最も重要度が低い人生役割は、進学校、進路多様校共に「地域・社会」であった。人生役割毎に、学校別の回答結果をWelchのt検定で分析した結果、「地域・社会」[t(149.24)

表2 調査2の調査内容・項目

負担	
仕事	仕事
家庭生活	家事・育児・介護などの家庭生活
地域参加	地域・社会の活動への参加
自主的学習	自ら学習すること
余暇	余暇・空き時間を充実させること
時間	
仕事	仕事の時間
家庭生活	家族や家事・育児・介護など家庭の時間
余暇	趣味や友人との関わりなど、余暇の時間
その他	
地域参加の機会	地域・社会の活動に参加できる機会
自主的学習の必要性	自ら学習する必要性
情報社会のイメージ	
期待	1 より多くの情報を入手できる社会
	2 ほしい情報にすぐにアクセスできる社会
	3 日常生活が便利に過ごせる社会
	4 仕事の効率が上がり、仕事が楽になる社会
	5 自分の生きる世界が広がり、新しい可能性が広がる社会
	6 だれでも考えを発信できる社会
	7 あらゆる情報が氾濫する社会
	8 コンピュータやインターネットが使いこなせないと不利な社会
	9 反社会的な行為や異常犯罪が増加する社会
	10 コンピュータやインターネットの不具合が生活に支障をきたす社会
個人情報	11 自分の個人情報が出たり、悪用される社会
人間関係へ影響	12 見えない相手とのコミュニケーションによる人間関係のトラブルが増加する社会
	13 人との交流範囲が広がる社会
	14 対人関係が疎遠になったり、人とのふれあいが減ったりする社会
社会の変化	15 善悪の判断基準や社会の常識が日々変わる社会
	16 仕事が忙しくなり、休みや暇が減少する社会
AI（人工知能）のイメージ	
期待	1 多くの情報を持っている
	2 作業が早い
	3 何でもできる
	4 ミスをおこさない
	5 正しい判断ができる・情報に根拠がある
不安	6 人間の仕事が奪われる
	7 個人情報などの情報が漏洩する
	8 問題が発生したときの責任の所在が不明確
	9 判断が正しいか不明確で情報に根拠がない
	10 人間の意思や感情がコントロールされる

= 2.277, $p = .024$, $d = 0.334$], 「自主的学習」[t(160.76) = 2.851, $p = .005$, $d = 0.410$], 「余暇」[t(210.79) = 2.384, $p = .018$, $d = 0.308$]において、それぞれ有意な差がみられた。

次に、調査2-1のクロス集計を表4に示す。調査2-1の「負担」について回答割合を参照すると、進学校で「楽になる」の割合が最も大きかったのは、「自主的学習」、進路多様校では「仕事」であった。人生役割毎に学校別の回答結果を χ^2 独立性の検定で分析した結果、「仕事」[$\chi^2(2, N = 267) = 25.37$, $p < .001$], 「家庭生活」[$\chi^2(2, N = 267) = 22.64$, $p < .001$], 「余暇」[$\chi^2(2, N = 266) = 9.55$, $p = .008$]においてそれぞれ有意な差がみられた。 χ^2 独立性の検定の

結果が有意であった項目について、どのセルが有意に多いまたは少ないかを明らかにするために残差分析を行った。残差分析の結果として、度数が有意に多いセルは「+」、少ないセルは「-」を度数に併記した。残差分析の結果、進路多様校ほど「仕事」「家庭生活」「余暇」を「楽になる」と捉える比率が有意に高く、反対に「大変になる」と捉える比率が有意に低い傾向がみられた。「地域参加」や「自主的学習」については、偏りがなかった。

調査 2-1 の「時間」について、回答割合を参照すると「増える」の割合が最も高かったのは、進学校では「家庭生活」、進路多様校では「余暇」であった。人生役割毎に学校別の回答結果を χ^2 独立性の検定で分析した結果、「仕事」 [$\chi^2 (2, N = 266) = 6.64, p = .036$], 「家庭生活」 [$\chi^2 (2, N = 266) =$

7.83, $p = .020$] において有意な差がみられた。有意差がみられた項目について、「負担」の分析同様に残差分析を行った。残差分析の結果、進路多様校ほど「仕事」と「家庭生活」の時間が「減る」と捉える比率が有意に高い傾向がみられた。また、「家庭生活」の時間については「増える」と捉える比率が有意に低い傾向がみられた。「地域参加の機会」と「自主的学習の必要性」について、学校別の回答結果を χ^2 独立性の検定で分析した結果「地域参加の機会」 [$\chi^2 (2, N = 265) = 16.24, p < .001$] において有意な差がみられた。残差分析の結果、進路多様校ほど「地域参加の機会」が「増える」と捉える比率が有意に高く、「減る」と捉える比率が有意に低い傾向がみられた。

表 3 調査 1 の結果

	進路多様校 (n = 133)		進学校 (n = 81)		t 値	自由度	p 値	有意差	Cohen's d
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差					
① 高校生の今の人生									
学校の勉強	18.87	11.33	21.85	9.10	2.006	196.29	0.036	*	0.284
部活動	18.80	14.51	18.89	9.08	0.057	211.82	0.955		0.007
家庭生活	21.13	10.92	20.25	7.90	0.682	205.66	0.496		0.090
地域・社会	5.79	6.42	6.54	6.36	0.838	170.44	0.403		0.118
自主的学習	7.14	8.22	12.10	8.47	4.197	165.08	P < .001	**	0.599
余暇	28.27	15.10	20.37	10.54	4.497	208.01	P < .001	**	0.585
② 就職して 3 年後の人生									
仕事	32.54	11.28	30.85	10.21	1.130	184.58	0.260		0.155
家庭生活	23.88	12.86	23.41	10.91	0.284	192.48	0.777		0.039
地域・社会	7.54	6.54	9.88	7.78	2.277	149.24	0.024	*	0.334
自主的学習	8.06	8.09	11.46	8.77	2.851	160.76	0.005	**	0.410
余暇	27.99	13.08	24.39	9.04	2.384	210.79	0.018	*	0.308

Welch の検定, * : P < .05 ** : P < .01

表 4 調査 2-1 の結果

	進路多様校				進学校				χ^2 値	P 値
	1:楽になる	2:変わらない	3:大変になる	n	1:楽になる	2:変わらない	3:大変になる	n		
仕事	107 (65.64%) +	22 (12.88%)	35 (21.47%) -	164	36 (34.62%) -	18 (18.27%)	49 (47.12%) +	103	25.37	P < 0.001**
家庭生活	73 (44.79%) +	62 (37.42%)	29 (17.79%) -	164	20 (19.23%) -	43 (42.31%)	40 (38.46%) +	103	22.64	P < 0.001**
地域参加	34 (20.99%)	107 (65.43%)	22 (13.58%)	163	19 (18.27%)	66 (64.42%)	18 (17.31%)	103	0.87	0.646
自主的学習	70 (42.33%)	65 (39.88%)	29 (17.79%)	164	45 (44.23%)	31 (29.81%)	27 (25.96%)	103	3.81	0.149
余暇	95 (58.02%) +	47 (29.01%)	21 (12.96%) -	163	41 (40.38%) -	38 (36.54%)	24 (23.08%) +	103	9.55	0.008**
時間										
	1:増える	2:変わらない	3:減る	n	1:増える	2:変わらない	3:減る	n		
仕事	45 (27.78%)	31 (19.14%)	87 (53.09%) +	163	34 (32.69%)	30 (28.85%)	39 (38.46%) -	103	6.64	0.036*
家庭生活	49 (30.25%) -	65 (40.12%)	49 (29.63%) +	163	47 (45.19%) +	37 (35.58%)	19 (19.23%) -	103	7.83	0.020*
余暇	74 (45.96%)	49 (30.43%)	39 (23.60%)	162	40 (38.46%)	40 (38.46%)	23 (23.08%)	103	2.15	0.341
その他										
	1:増える	2:変わらない	3:減る	n	1:増える	2:変わらない	3:減る	n		
地域参加の機会	46 (28.40%) +	64 (39.51%)	52 (32.10%) -	162	12 (11.65%) -	35 (33.98%)	56 (54.37%) +	103	16.24	P < 0.001**
自主的学習の必要性	62 (38.27%)	43 (26.54%)	57 (35.19%)	162	40 (38.83%)	24 (23.30%)	39 (37.86%)	103	0.39	0.822

独立性の検定 (χ^2 検定), * : P < .05, ** : P < .01

表 5 調査 2-2 の結果

	進路多様校			進学校			t 値	自由度	p 値	有意差	Cohen's d
	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差					
情報社会そのものに対するイメージ											
期待	983	4.272	0.783	616	4.104	0.919	3.755	1152.81	P<.001	**	0.200
不安と懸念	656	3.813	0.970	412	4.167	0.828	6.380	971.99	P<.001	**	0.387
個人情報	164	3.659	0.962	103	3.961	0.851	2.688	236.25	0.008	**	0.330
人間関係への影響	488	3.943	0.934	309	4.065	0.913	1.824	666.16	0.069		0.132
社会の変化	324	3.278	0.997	206	3.519	0.946	2.807	453.30	0.005	**	0.248
AI (人工知能) に対するイメージ											
期待	819	3.928	1.066	515	3.930	1.150	0.034	1030.29	0.973		0.002
不安	817	3.645	1.072	515	3.792	1.043	2.482	1115.01	0.013	*	0.139

Welch の検定, * : P<.05 ** : P<.01

最後に、調査 2-2 の分析結果を表 5 に示す。「情報社会そのもの」のイメージ調査について、進学校で最も平均値が大きかった項目は、「不安と懸念」であった。進路多様校で最も値が大きかった項目は、「期待」であった。一方、最も値が小さかった項目は進学校・進路多様校共に「社会の変化」であった。分類毎に、学校別の回答結果を Welch の t 検定で分析した結果、「期待」[t (1152.81) = 3.755, p < .001, d = 0.200], 「不安と懸念」[t (971.99) = 6.380, p < .001, d = 0.387], 「個人情報」[t (236.25) = 2.688, p = .008, d = 0.330], 「社会の変化」[t (453.30) = 2.807, p = .005, d = 0.248] において、それぞれ有意な差がみられた。

調査 2-2 の「AI (人工知能)」に対するイメージ調査について平均値を参照すると、平均値が大きかったのは進学校、進路多様校共に「期待」であった。分類毎に学校別の回答結果を Welch の t 検定で分析した結果、「不安」[t (1115.01) = 2.482, p = .013, d = 0.139] において有意な差がみられた。

4 考察

本研究の目的は、進路多様校の高校生が「これからの情報社会を生きること」に、どのようなイメージを有しているのかを明らかにすることであった。本節では、調査毎に、進学校との比較を通して進路多様校の実態を考察する。そして、明らかになった実態を踏まえて、情報社会におけるライフキャリア教育の内容構築に向けた実践的示唆について考察を行う。

調査 1 よりよく生きるために重視する人生役割

調査 1 の「①高校生の今の人生」の結果、進路多様校より進学校の生徒の方が、「学校での勉強」及び「自主的な学習」を重視していた。それに対し、「余暇」については進路多様校の生徒の方が重視していた。進学校の生徒が学校の勉強や自主的な学習に重きを置く傾向は妥当な結果であると考えられる。なぜならば、進学校は多くの生徒が大学入試を受験する状況にあり、学習活動は日々の重要な活動の 1 つとして位置づけられていると考えられるからである。これに対して、進路多様校には大学進学を希望する生徒が少ない。実際に、進路多様校には業績主義的な価値観に馴染まない生徒がおり (刈谷ら, 2002)²⁸、大学進

学によって学歴を獲得する意識が低い生徒がいる (長谷川, 2012)²⁹ と指摘されている。ここで、進学校より進路多様校の生徒の方が「余暇」を重視していたのは、日々の学習に価値を置かない分、その意識が「余暇」に向けられたためだと考えられる。この差は「②就職して 3 年後の人生」にも同様にみられた。就職後の人生を想定したとしても両者に見られるこのイメージの差に大きな変化が現れることはないと考えられる。

一方、調査 1 の「②就職して 3 年後の人生」の結果では、両高校とも「仕事」を最も重視していた。この結果からは、就職後の人生になると進学校・進路多様校に関係なく、「仕事」の充実に価値を置くようになるということである。仮に、高校生の時代の「学校での勉強」に割かれていた時間や労力は、社会人の「仕事」に置き換わると考えた時、進学校の生徒が就職後の人生で「仕事」を重視するのは想定できる。なぜならば、高校生の人生で「学校での勉強」に向けられていた重要視の方向性が、そのまま「仕事」へと置き換わったと考えられるからだ。しかし、進路多様校の高校生は「学校での勉強」を特に重視しているわけではなかった。それにも関わらず、進路多様校の生徒が就職後の人生で「仕事」を重視することからは、「学校での勉強」には実感できていない人生における重要性や価値を、将来の「仕事」には見出すことができていると考えられる。

このように考えると、進学校と比べて進路多様校の生徒は、「学校での勉強」と将来の「仕事」との繋がりをあまり認識できていないと考えられる。進学校では、目の前の大学入試に成功する (ために「学校での勉強」を重視すること) で最終的に自身の仕事の充実に繋がる、と学習の価値を段階的にイメージがしやすい。一方で、進路多様校の生徒は、高校卒業後すぐに就職、或いは仕事に関する専門的な知識を学ぶ専門学校への進学を見据える割合が高く、学校で勉強した内容が仕事に影響することを実感しにくい。こうした差が「学校の勉強」と「仕事」との繋がりに対する認識を希薄にしていると考えられる。

また、将来の人生においても進学校より進路多様校の生徒の方が「余暇」を重視していた。その理由の 1 つとして、

進路多様校の生徒の方が、将来の人生における「余暇」の存在を意識しやすいからだと考えられる。一般的に、「余暇」の時間は「仕事」から解放された時間として仕事と対比され捉えられることが多い。進路多様校の方が卒業後に就職を控える生徒が多く、働くことに対するイメージをより強く持っていると考えられる。それに伴って、「仕事」と対照的な「余暇」に対する意識や価値も進学校より認識しやすかったと考えられる。もう1つの理由としては、進学校と比べて人生における「自主的学習」の重要性をあまり実感していないからだと考えられる。高校生の人生で「学校での勉強」を重視しない分、余暇へ意識が集まったと考えられたように、就職後の人生でも学習を重視しない分、相対的に余暇への比重が高まったと考えられる。

全体的に見ると、将来の人生では両高校とも「仕事」だけでなく「余暇」や「家庭生活」の充実も重視する傾向にあり、高校生の段階からワークライフバランスを重視した生き方を望んでいることが伺える。田澤(2005)の2004年に行われた調査では、「仕事」や「家庭生活」(に該当する項目「家族」と、「余暇」との間には10点以上の差があった。しかし、本研究では、「仕事」「家庭生活」「余暇」の間に両高校ともそれだけの得点差は見られなかった。むしろ、「余暇」が「家庭生活」よりも重要視された。これに関して日本レクリエーション協会(1998)³⁰は「余暇のあり方が第一義的に重要で、そこから労働や生活の在り方が規定されるという状況が生まれようとしている」と述べている。田澤(2005)の研究と本研究では、調査対象や想定する場面など調査条件には違いがある。しかし、高校生も女子大学生も「就職前の若者」という括りで捉えれば、近年の若者の「余暇」に対する重要性は「仕事」や「家庭生活」と同等程度、或いはそれ以上に高まりつつあると考えられる。

最後に、人生役割の「地域・社会」については、「①高校生の今の人生」と「②就職して3年後の人生」で両高校とも最も重要度が低かったことから、近年の高校生にとって「地域・社会」への参画の価値はあまり高くないことがわかる。しかしその一方で、そもそも高校生にとって「地域・社会への参加」がどのような活動であり、どのような状態を意味するのか回答の際にイメージが困難であった可能性も考えられる。一般的に「地域・社会への参加」の具体的な活動としてはボランティアや地域行事への参加が挙げられるが、近年は特定の活動への参加を意味するよりも、「人と人が関わり合う機会への参加」として捉えられることがある³¹。この捉え方の場合「地域・社会への参加」は、「仕事」や「余暇」などの人生役割と重なる部分が多く、1つの人生役割として位置付けるのが難しいと考えられる。今後はこうした点を考慮し、「地域・社会への参加」を「他者との人間関係やコミュニケーションの充実」と捉え、改めて先行研究や調査によって高校生の実態

を明らかにしていくことが課題だと考えられる。本研究においては「地域・社会」が、調査対象にとってイメージしづらい表現であった点に研究上の課題があったと考え、「地域・社会」に関係する内容は、以降の考察から除外した。

調査2 情報社会に関するイメージ

調査2-1の結果、進路多様校の生徒は進学校と比べて情報社会の「仕事」「家庭生活」「余暇の充実」が「楽になる」と捉え、「仕事」「家庭生活」の時間は減少すると捉えていた。情報社会におけるこれらの人生役割に対して、ポジティブなイメージを持っていることが伺える。特にこれらの人生役割は、調査1の「②就職して3年後の人生」で重視する人生役割と同じであった。つまり、進路多様校の生徒は、将来の人生で重視する人生役割を実際に充実させることに対しても難しさを感じてはならず、楽観的に捉えられていると考えられる。

なぜ進学校の生徒よりも、進路多様校の生徒の方が情報社会の人生役割を楽観的に捉えているのか。これには、情報社会やAIに対するポジティブな印象が、情報社会の人生役割を楽観的に捉えられることに影響していると考えられる。「情報社会そのもの」の調査の結果では、進路多様校の方が「期待」のイメージが強く、反対に進学校の方は「不安と懸念」のイメージが強かった。これは、進路多様校では情報社会のメリットに着目する生徒が多く、進学校では、情報格差といった情報技術が発展したが故のデメリットに着目する生徒が多いということである。こうした傾向は、「個人情報」の調査結果や、「AI(人工知能)」の調査における「不安」の結果からも同様のことが伺える。

ただし、学習経験の差が本結果に及ぼした影響については考慮する必要があると思われる。進学校の生徒は既に「社会と情報」を履修済みであり、進路多様校の生徒は「情報I」の授業を履修途中であった。調査時、進路多様校の生徒も「情報I」の「情報社会の問題解決」の項目を学習中であり、情報技術が現代社会に及ぼす影響については一定の学習を経ていたと考えられるが、進学校の生徒の方が情報社会の便利な側面だけでなく負の側面の理解が一層進んでいたとも考えられる。

実践的示唆

以上の考察から、進路多様校の生徒を対象とした情報社会におけるライフキャリア教育の内容構築に向けた実践的示唆を検討する。

情報社会をよりよく生きる上では、各人生役割を自立的に充実させていく力が必要である。従来のライフキャリア教育の実践を具体的にみると、扱われている人生役割は「仕事」「家庭生活」「地域生活」の3つの側面であり、この3つを統合的に考える中で自立的に生きる力を育成する学習が行われてきた(丸山, 2016)。進路多様校の生徒が「仕事」や「家庭生活」を重視していたことを踏まえる

と、従来のライフキャリア教育を行うことは依然として意味があり、一定の効果を得られると考えられる。しかし冒頭で示した通り、ライフキャリア理論における人生役割はこの3つに限ったものではなく、Super や Hansen によって「余暇」や「学習」も示されている。特に近年では、情報技術が発達するにつれてこれら人生役割の重要性が一層叫ばれるようになってきている。

「余暇」は、リンダ・グラットンら (2023)³²が、「今後は余暇時間がさらに増え、労働時間はさらに減る可能性が高い」と述べているが、これは情報技術による作業の効率化やオンライン化が要因の1つとして挙げられている。労働時間が減れば余暇時間が増えるように、仕事と余暇との関係は密接で、両者は統合的に捉えることが重要である。また、余暇そのものが人生の幸福に大きな影響を与えることは従来の多くの研究でも指摘されており、これからの情報社会で余暇を充実させる力を身に着けることの重要性は高いと考えられる。

こうした状況を踏まえると、進路多様校の生徒がこれからの人生において「余暇」を重視し、その充実を楽観的に捉えている現状は、今後の情報社会における「余暇」生活を前向きに捉えられていると考えられ、関心・意欲の点においてよい傾向にあると思われる。しかし、「余暇」の充実を前向きに捉えられることと、実際に「余暇」を充実させることは同義ではない。瀬沼 (1989)³³は「休息とか気晴らしで刹那的、場当たりの余暇だけでは「時間とエネルギーが、ただ浪費していくだけ」と、余暇の充実の課題を以前から指摘している。そして、自己開発・自己実現を余暇の最終目標とする「生産的余暇」の必要性を指摘している。しかし、スマートフォン等の情報メディアが普及した情報社会では、刹那的・場当たりの余暇が益々手軽なものとして普及すると考えられ、「生産的余暇」による余暇の充実が一層困難になると考えられる。これまでも「学校でも余暇の活用法を教える必要性は、ますます高くなる」³¹と、若年層段階からの余暇教育の必要性は指摘されてきた。しかし、実際に余暇を扱った学習が学校現場で行われてきた事例は、特別支援学校における実践³⁴を除いてあまり見られない。その理由の1つに、高校生の余暇に対する関心の実態がこれまで明らかにされておらず、余暇教育の必要性が学校現場で明確に浮上してこなかったことが考えられる。しかし、社会の情報化が進むにつれて、近年の若者の余暇に対する関心が高まっているのは本調査で明らかになっている。余暇への関心と、実際に余暇を実現させられることとの間にある差を埋めるためには、ライフキャリア教育で「余暇」の活用に関する学習を行い、余暇を自立的に充実させていくために必要な能力を育成することが求められると考えられる。

ただし、本研究では、進路多様校の生徒が「余暇」をどのように捉えて「余暇」の充実を「楽になる」と判断した

のかの具体的な実態までは明らかにできない。今後は、進路多様校の生徒を対象としたより詳細な実態調査を行い、「余暇」に関する課題を明らかにする必要がある。仮にここで進路多様校の生徒が、刹那的・場当たりの余暇生活をイメージして余暇の充実を楽観的に捉えていることが明らかになった場合、そこへの教育的介入の必要性が一層高まると言えるだろう。

「学習」については、近年生涯学習やリカレント教育の観点から、学校卒業後も生涯学び続けることの重要性が指摘されている。こうした生涯の「学び」の必要性は、「AI・IoT・ロボットの社会実装の進展による雇用環境の変化に対応する」(総務省, 2018)³⁴点から指摘されており、変化の激しい情報社会では特に重要性が高い人生上の役割であるといえる。進路多様校の生徒が、「自主的な学習」をあまり重視できていない現状を踏まえると、ライフキャリア教育において、人生における「学習」の重要性を示していくことは必要不可欠だと考えられる。ここでは、進路多様校の生徒が生涯における学習の価値を実感できるようにすることが課題だと考えられるが、そもそも生涯における学習は、「学校教育、家庭教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味」(文部科学省, 2019)³⁵など、仕事や学校での勉強に限ったものではない。高校生が持つ「学習」そのもののイメージや認識を広げ、「学習」に価値を見出し、生涯の学習活動を充実させられる力の育成が必要だと考えられる。

一方で、人生をよりよく生きるためには人生上の苦難と適切に向き合う力も必要不可欠である。実際、国立教育政策研究所 (2016)³⁶の高等学校卒業者を対象とした調査によると、高等学校でのキャリア教育には「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応についての学習」のニーズが高いことが明らかになっている。特に、情報社会においては「仕事」に関して情報技術が発展するが故の離職や失業のリスクが懸念されている。これは「テクノ失業」と呼ばれている(倉嶋, 2022)³⁷。また、従来の学校・仕事・退職後の引退生活という3ステージ型の人生が崩壊する(リンダ・グラットンら, 2023)との指摘もあり、現代においては、再就職や転職などの人生イベントと向き合うことは避けられなくなりつつある。それぞれが密接に繋がり合う人生役割において、「仕事」のリスクは「家庭生活」や「余暇」のリスクであるともいえる。例えば、経済的側面に着目すれば、予期せぬ失業による収入の減少は、家庭生活や余暇の質を突発的に低下させ、生きることへの心理的な不安を増加させると考えられる。また、その後求められる再就職も容易なことではなく、心理的・経済的な負担が小さいとは言えないだろう。こうしたリスクは Well-being の状態を遠ざけるものであるが、情報社会においては完全に避けることが難しい。情報社会を

よりよく生きる上では、人生上の諸リスクと適切に向き合い、対応していく力が必要不可欠だと考えられる。

しかし、本調査から進路多様校の生徒は、情報社会を生きること楽観的である傾向がみられた。将来に前向きであるのは良い点だが、言い換えれば、情報社会の負の側面に対する認識が弱く、社会の情報化が人生にもたらすリスクにまで考えが及んでいないと考えられる。この状況を踏まえると、高校生が情報社会をよりよく生きていくためには、情報社会の影響が特に大きい「仕事」を中心に多様な人生役割から人生上の諸リスクについて包括的に考え、適切に向き合い対応できる力を育成していく必要があると考えられる。ここでは、直面し得るリスクそのものに対する知識や対処方法だけでなく、人生でリスクと向き合っていく際の心理的側面にも着目する必要があると考えられる。これに関しては、過去に「ライフキャリア・レジリエンス」としての研究がある。これは、「不安定な社会の中で自らのライフキャリアを築き上げる力」(高橋, 2015)³⁸である。人生上の諸リスクと適切に向き合う力を育成する際には、こうした知見が参考にできるだろう。

以上、進路多様校の生徒を対象とした情報社会におけるライフキャリア教育では、「仕事」「家庭生活」「地域生活」に着目した従来のカリキュラム(河崎, 2011)を基礎としつつ、情報社会と進路多様校の実態を踏まえて「余暇」と「生涯における学習」を充実させる力の育成を目的とした学習を取り入れる必要があると考えられる。さらに、人生役割に関する情報社会の諸リスクと適切に向き合う力の育成が必要である。「各人生役割の質を向上させていく力」と「リスクや苦難に対応していく力」の両側面を育成していくことで、高校生が情報社会をよりよく生きていくことの実現に繋がると考えられる。

今後の課題と展望

課題として、今後も対象の条件を統一した継続的な調査が必要であると考えられる。本考察は、あくまで現代の高校生のイメージをもとに行ったものである。情報社会が急速に発展していくことを踏まえると、高校生のイメージが時代と共に変化していくことも否定できない。継続調査で得られた結果からは、本調査との比較から高校生のイメージの変化に関する実態が明らかにできるだろう。変化の度合い次第では、ライフキャリア教育で特に重点的に学習すべき内容等の精査などが今後必要になると考えられる。

関連して、情報社会が今後の人生にもたらす変化については、高校生のイメージだけではなく、専門的な知識を有する者を対象とした調査から、より信頼性の高い情報を得る必要がある。例えば、情報分野の研究を行う学者を対象とした調査が考えられる。

今後は、考察で述べた「余暇」や「人との関わり」に関する調査も含め、さらなる実態調査を行いながら、より具

体的に育成すべき力の検討と学習内容の構築を行う必要がある。

以上、課題は残されているが、進路多様校の生徒を対象とした情報社会におけるライフキャリア教育の内容構築に向けた示唆を提供できた点に本研究の意義があると考えられる。本研究の知見は、ライフキャリア教育の実践的な授業開発の促進につながり、高校生が情報社会をよりよく生きるための力の育成に貢献することが期待できる。

註

- i. 「進路多様校」の定義について、小川(2021)は、「大学進学を目指す生徒の比率が低い」高等学校と示し、水野(2013)は「高校卒業後進学する生徒もいれば、就職する生徒もいる高校」と示している。
- ii. 文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説情報編」によれば、主に、「問題解決の方法」「情報技術が人や社会に及ぼす影響」「モラルやセキュリティ」等について学ぶ。
- iii. 例えば、松下ら(2002)³⁹や黒川(2021)⁴⁰が、知的障害や発達障害のある子どもの余暇活動について研究をしている。

引用・参考文献

- 1 中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」, 1999, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm, (閲覧日: 2023/08/25)
- 2 文部科学省『高等学校キャリア教育の手引き』, 教育出版, 2017
- 3 児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』, 筑摩書房, 2018
- 4 前田信彦『キャリア教育と社会正義 ライフキャリア教育の探究』, 勁草書房, 2022
- 5 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」, 2011, https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf, (閲覧日: 2023/08/25)
- 6 Super, D.E., A theory of vocational development. *American Psychologist*, 8(5). 1953. 185-190.
- 7 Hansen, L.S., Integrative life planning: Critical tasks for career development and changing life pattern. 1996. San Francisco, CA: Jossy-Bass.
- 8 河崎智恵「ライフキャリアの能力・態度に関する尺度構成の試み」, 『キャリア教育研究』29巻1号, 2010, pp. 25-30
- 9 文部科学省, 中央教育審議会教育振興基本計画部会(第13回)会議資料「【資料8】ウェルビーイングの向上について(次期教育振興基本計画における方向性)」, <https://www.mext.go.jp/kaigisiryoo/content/000214299.pdf>, (閲覧日: 2023/11/08)
- 10 国立教育政策研究所「OECD 生徒の学習到達度調査 PI

- SA2015年調査国際結果報告書 生徒の Well-being (生徒の『健やかさ・幸福度』), 2017, https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/pisa2015_20170419_report.pdf, (閲覧日: 2023/01/08)
- 11 内閣府人間力戦略研究会「人間戦略研究会報告書 若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める～信頼と連携の社会システム～」, 2003, <https://www5.cao.go.jp/keizai1/2004/ningenryoku/0410houkoku.pdf>, (閲覧日: 2023/08/25)
- 12 経済産業省「社会人基礎力」, <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>, (閲覧日: 2023/08/25)
- 13 厚生労働省「企業が若者に求める就職基礎能力」, <https://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/04/h0427-2b.html>, (閲覧日: 2023/08/25)
- 14 河崎智恵「ライフキャリア教育における能力領域の構造化とカリキュラムモデルの作成」, 『キャリア教育研究』29巻2号, 2011, pp.57-69
- 15 河崎智恵「家庭科におけるキャリア教育モデルの開発」, 『日本教科教育学会誌』23巻1号, 2000, pp.67-75
- 16 河崎智恵「家庭科におけるキャリア教育モデルの検討ー能力領域の尺度の構成を中心にー」, 『進路指導研』22巻1号, 2000, pp.25-34
- 17 丸山実子・河崎智恵「ライフキャリア教育における授業プログラムの枠組構築ー日米家庭科教科書分析を手がかりとしてー」, 『奈良教育大学教職大学院研究紀要』8巻, 2016, pp.59-66
- 18 丸山実子「高等学校・大学におけるライフキャリア教育の実践」, 『奈良教育大学教職大学院研究紀要』8巻, 2016, pp.67-75
- 19 可知穂高・安永太地・塩田真吾「ライフキャリア教育に関する国内の研究動向の到達点と課題ー情報社会の変化に対応したライフキャリア教育の実践に向けてー」, 『静岡大学教育実践総合センター紀要』33巻, 2023, pp.78-90
- 20 小川須美江「高等学校におけるキャリア教育の意義に関する考察ー進路多様校のデュアルシステムを事例としてー」, 『発達教育学研究』15巻, 2021, pp.1-10
- 21 水野裕子「進路多様校におけるキャリア教育ー実践モデルと実践手段の考察ー」, 『教師教育研究』9巻, 2013, pp.151-161
- 22 経済協力開発機構 (OECD) 編著『デジタル世界のスキル形成ーデジタルトランスフォーメーションが導く仕事・生活・学び (OECDスキル・アウトック 2019年版)』, 明石書店, 2021
- 23 スタッフサービス・ホールディングス「【テレワーク導入後の働き方に関する意識調査】」, 2020, https://www.staffservice.co.jp/nt-files/nr_200617.pdf, (閲覧日: 2023/08/25)
- 24 一般社団法人日本経済団体連合会「Society5.0 Co-CRE ATEING THE FUTURE-ともに創造する未来-」, 2018, https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/095_sasshi.pdf, (閲覧日: 2023/09/05)
- 25 田澤実「ライフ・キャリア・パースペクティブと将来イメージの関連ー女子大学生が展望する仕事・家族・余暇の重み付けー」, 『進路指導研究』第23巻第2号, 2005, 19-25
- 26 直井優・菅野剛・岩淵亜希子「情報化社会に関する全国調査 (JIS2001) の概要」『大阪大学院人間科学研究科紀要』29巻, 2003, pp.22-66
- 27 消費者庁「第1回消費者意識調査結果 (AIに対するイメージについて)」, https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_policy/meeting_materials/assets/consumer_policy/cms101_20316_03.pdf, (閲覧日: 2023/08/25)
- 28 刈谷剛彦・濱中義隆・大島真夫・林未央・千葉勝吾「大都市圏高校生の進路意識と行動ー普通科・進路多様校での生徒調査をもとにー」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』42巻, 2002, pp.33-63
- 29 長谷川誠「進路多様校生徒における進路意識に関する研究ー誰が、大学に進学しないのか?ー」『佛教大学大学院紀要教育学研究科篇』40号, 2012, pp.35-51
- 30 財団法人日本レクリエーション協会編著『レジャー・カウンセリング』, 大修館書店, 1998
- 31 鎌田進也「地域社会づくりにおける『つながり』概念の検討」, 『立正社会福祉研究』12巻2号, 2011, pp.37-44
- 32 リンダ・グラットン・アンドリュー・スコット『16歳からのライフ・シフト』, 東洋経済新聞社 2023
- 33 瀬沼克彰『余暇教育の出発』, 学文社, 1989
- 34 総務省「第1部 第5節 ICTの進化によるこれからのしごと」平成30年版 情報通信白書」, <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd145320.html>, (閲覧日: 2023/08/25)
- 35 文部科学省『平成30年度文部科学白書 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン 激甚化する災害への対応強化』, 日経印刷, 2019
- 36 国立教育政策研究所「再分析から見えるキャリア教育の可能性ー将来のリスク対応や学習意欲, インターンシップ等を例としてー」, 2016, https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/27career_shiryuu/all.pdf, (閲覧日: 2023/08/25)
- 37 倉野洋輔『AI時代のキャリア生存戦力』, BOW&PART NERS, 2022
- 38 高橋美保「第11章 ライフキャリア教育プログラムの開発『ライフキャリア・レジリエンス』を高めるために」, 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会 (編著)『カリキュラム・イノベーション新しい学びの創造へ向けて』, 東京大学出版会, 2017
- 39 松下浩之・福本稜佑「知的障害のある子どもの余暇活動に関する調査研究」『障害科学研究』46巻1号, 2022, pp.149-162
- 40 黒川竜太「発達障害特性のある青少年への余暇体験に注目した心理的支援」『熊本大学教育学部紀要』70号, 2021, pp.173-179

【連絡先 可知穂高 hodaka09231997@gmail.com
塩田真吾 shiota.shingo@shizuoka.ac.jp】

High-school Students' Idea of Living in the Information Society from a Life-centered Career Perspective

— A Comparison between Preparatory and Career-diverse Schools —

Kachi Hodaka, Shiota Shingo

Cooperative Doctoral Course in Subject Development in the Graduate School of Education Aichi University of Education & Shizuoka University, Shizuoka University Faculty of Education

Abstract

In recent years, career education has focused on various roles not only in the workplace but also in life. However, conventional life-centered career education lacks the perspective of the information society of the future, and only a few activities have targeted schools with diverse career paths. Hence, this study conducted a survey on “roles that are important in life” and “images of the information society” among high-school students in preparatory and career-diverse schools to develop the contents of life-centered career education in the information society for the latter students. The results showed that high-school students emphasized the importance of “work,” “family life,” and “leisure time” in their lives. Students in career-diverse schools perceived that the information society would present fewer challenges and that they would have less time for “work” and “family life” and more time for “leisure.” These students were also optimistic about living in the information society, whereas students who imagined negative aspects such as risks were less likely to be optimistic.

Keywords

Life career education, career education, leisure, lifelong learning, life risks